

澁澤青淵先生旧詩

内 山 峡 後学 木内敬篤 解説

内山峽の碑

洪沢青淵先生内山峽之詩の拓影

澁澤青淵先生内山峽之詩
 襄山蜿蜿如波浪西接信山相送
 迎奇險就中内山峽天然崔嵬如
 刃成刀陰耕夫青淵子取鬻向信
 取路程小春初八好風景蒼松紅
 楓草鞋輕三叉腰刀涉棧道一卷
 肩書攀崢嶸涉攀益深險彌酷奇
 巖怪石磊磊橫勢衝青天攘臂躋
 氣穿白雲唾手征日亭未牌達絕
 頂四望風色十分晴遠近細辨濃
 与淡幾青幾紅更渺茫始知壯觀
 存奇險探盡真趣游子行恍惚此
 時覺有得慨然拍掌歎一聲君不
 見遁世清心士吐氣吞露求蓬瀛
 又不見汲之名利客朝奔暮走趨
 浮榮不識中間存大道徒將一隅
 誤終生大道由來隨處在天下萬
 事成於誠父子惟親君臣義友敬
 相待弟与兄彼輩著眼不到此可
 憐自甘拂人情篇成長吟澗谷應
 風捲落葉滿山鳴
 昭和十五年十一月廿四日建之
 後學木内敬篤謹書

岡本作次郎字

渋沢青淵先生之巖碑(副碑)

子爵青淵先生十九歳にして内山峽を過り絶勝を嘆賞して此詩を賦せらる。一誦して九十二歳の終生を一貫せる道徳経済合一の大義が既に此の時に胚胎せるを知るべく、再吟して明治・大正・昭和に亘り一世に高かりし功業徳望の由来する所を感得せずんばあらず、因て郷人有志相謀り、茲に巖碑を鑿立して景仰の意を致すと云

昭和十五年十一月廿四日

顧問

東京市	伊藤松宇	小諸町	小山邦太郎
野沢町	並木齡輔	臼田町	井出今朝平
三岡村	塩川正巳	岸野村	木内政蔵
平賀村	鈴木覚治郎	東京市	三石勝五郎

主唱者

内山村	岩崎寛	朮水代表	中山茂治
平賀村	小林義助	朮水代表	竹花喜三郎
	内山尋常高等小学校長	武者八郎	

副碑撰文 小林義助

執筆 八十二翁

伊藤松宇

彫工 岡本作次

(渋沢青淵先生之巖碑(副碑)とは、「内山峽之詩」が刻まれた巨大な石碑の右側に小さな石碑があります。そこに地元関係者が由来を刻みました。)

内山峽

涉沢青淵

襄山蜿蜒如波浪
西接信山相送迎
奇險就中内山峽
天然崔嵬如剗成
刀陰耕夫青淵子
販鬻向信取路程
小春初八好風景
蒼松紅楓草鞋輕
三尺腰刀涉棧道
一卷肩書攀崢嶸
涉攀益深險弥酷
奇巖怪石磊磊橫
勢衝青天攘臂躋
氣穿白雲唾手征
日亭未牌達絕頂
四望風色十分晴
遠近細弁濃与淡
幾青幾紅更渺茫
始知壯觀存奇險
探尽真趣游子行
恍惚此時覺有得
慨然拍掌歎一声
君不見遁世清心士
吐氣吞露求蓬瀛
又不見汲汲名利客
朝奔暮走趁浮榮
不識中間存大道
徒將一隅誤終生
大道由来随处在
天下万事成於誠
父子惟親君臣義
友敬相待弟与兄
彼輩著眼不到此
可憐自甘弘人情
篇成長吟澗谷忘
風捲落葉滿山鳴

昭和十五年十一月廿四日建之

後学 木内敬篤 謹書

「内山峽之詩」訓読及び注解

木内敬篤

裏山じょうざん蜿蜒えんえんとして波浪はろうの如ごとく、西しの方信山しんざんに接あして相送迎そうげいす。

奇險就中内山峽きけん なかんづくうちやまきょう、天然てんねんの崔嵬さいがい剝けずり成なすが如ごとし

刀陰とういんの耕夫青淵子こうふせいえんし、販鬻はんいく信しんに向むかって路程ろていを取とる。

小春初八好風景しょうしゅんしやちこうふうけい、蒼松紅楓草鞋輕そうしょうこうふうそうあいかろし。

三尺の腰刀さんじやくようとう、棧道さんどうを涉わたり、一卷いっかんの肩書けんしょ崢嶸そうこうを攀よづ。

涉攀しょうはん益深險ますますふかくけんい、弥いよはなはだ酷こくしく、奇巖怪石磊磊きがんかいせきらいらいとして横よこたわる。

勢青天いきおせいてんを衝ついて臂ひを攘かげて躋のぼり、

氣きは白雲はくうんを穿うつて手てに唾つばして征ゆく。

日亭未牌絶頂にっていびはいぜつちやうに達たつし、四望しほう風色ふうしよく十分晴じふぶんはる。

遠近細えんきんこまかに弁べんず濃のうと淡たんと。幾青いくせい幾紅いくこう更に渺茫びやうぼう、

始はめて知しりぬ。壯觀そうかんの奇險きけんに存ぞんするを。真趣しんしゆを探さぐり尽つくして游ゆう子し行いく。

恍惚こうこつとして此時このとき得ある有あるを覺おぼゆ、慨然がいぜん掌しやうを拍うつて歎たんずること

一声いっせい。

君見きみみずや遁世とんせい清心せいしんの士し、氣きを吐はき露つゆを吞のんで蓬瀛ほうえいを求もとむること

を。

又また見みずや汲汲きゅうきゅう名利めいりの客きやく、朝奔暮走ちやうほんぼそう浮榮ふえいを趁おうを。

中間ちゆうかんに大道たいどうの存ぞんするを識しらず、徒いたらに一隅いちぐうを將もつて終生しゆうせいを誤あやま

大道たいどうは由来ゆらい随处ずいじよに在あり、天下てんか万事ばんじ誠まことに成なる。

父子ふうしは惟これ親ちかく、君臣くんしんは義ぎ、友敬ゆうけい相待あひまつ弟ていと兄けいと。

彼輩かはい著眼ちやくがん此こに到いたらず、憐あわれむ可べし自みづから甘あまんじて人情にんじやうに払もるを、

篇成へんなつて長吟ちやうぎんすれば澗谷かんこく応こたえ、風かせは落葉らくようを捲まいて満山まんざん鳴なる。

昭和一五年十一月

木内敬篤 謹書

詩句の説明

- 襄山(じょうざん) 上毛(上州)の山。襄は上に通ず。「のぼる」の義
- 蜿蜒(えんえん) うねりゆく貌。うねうねとして
- 崔嵬(さいかい) 全体石より成りて土を戴く山。いしやま
- 剗(がん) けずる。削。
- 刀陰(とういん) 刀は刀祢(とね)の略。陰は水の南の義。即ち利根川の南。
- 耕夫(こうふ) 農夫。
- 青淵(せいえん) 渋澤翁のこと。ご自宅後方沼のある地、淵上から号した。
- 販鬻(はんいく) 販はあきなう。鬻はひさぐ。
- 小春(しょうしゅん) 陰暦の十月の称。
- 初八(しよはつ) 月の初めの第八日。
- 腰刀(ようとう) 腰に佩びる刀。
- 棧道(さんどう) 棧は棚、棚を懸絶の処に施して通行せしめること。かけはし
- 肩書(けんしょ) 肩にかけたる書冊。
- 崢嶸(そうこう) 高く険しい貌。
- 涉攀(しょうはん) よじのぼること。
- 磊磊(らいらい) 石のゴロゴロと聚る(あつまる)貌。
- 攘臂(ひじをかかげて) 腕まくりをすること。
- 躋(のぼる) のぼる。
- 唾手(つばす) 手につばきす。勢いよく仕事に取り掛かるにいう。
- 征(ゆく) ゆく。
- 日亭(にってい) 日輪(太陽)の宿駅。日の亭次。即ち日脚。
- 未牌(びはい) 未(ひつじ)の刻。現在の午後二時。牌は標示の札のこと。
- 渺茫(びようぼう) 広く遙かなる貌。
- 恍惚(こうこつ) うっとりとしたる貌。
- 蓬瀛(ほうえい) 蓬莱と瀛州と。共に神仙の住するところ。
- 汲汲(ききゅうききゅう) 齷齪(あくせく)する貌。

現代文訳

木内敬篤

上毛の山うねりうねって波の如く、西の方遠く信濃の山に連なって、相送りつ相迎えつして居る。

而してその中で最も奇らしく険しいのは即ち内山峡である。天然の岩山が恰も削り成したるが如く至奇至妙を極め居る。

刀根川南の農夫我れ青淵、商用を以って信濃に向って旅程を取った。

時は恰も十月八日の好時節。山は蒼い松と紅の楓と相映え発して見る目を悦ばしめ、脚絆草鞋の足取りもおのずから軽やかに、

腰に三尺の刀、肩に一卷の書、悠々として棧道を涉り、峻しい岩を攀じ登ること益々深くなるにつれて險阻は弥弥甚だしく、珍しい巖、不思議な石がごろごろと横たわって居る。

意气青天を衝き、詩心白雲を穿ち、腕捲りして攀じ登り、手唾して進みゆく。

かくて未の刻限(午後二時)頂上に達し、乃ち眸を放てば、四望隈なく晴れ渡り、遠近細やかに濃淡を弁つることが出来、更に青い松林や紅のもみじの谷が涯もなく打続いて居る。

是に於いて始めて壮大なる眺めの、奇しく険しい中にあることを知った。かくて真実の風趣を存分に味わひつつも旅の子我は更に歩を進めて行く。

此の時、忽焉として胸中に閃くものがあつた。

慨然として掌を拍って感嘆すること一声。乞う見よ。夫世を遁れて独り心を清くし行い澄まして居る士を、

彼等は徒に氣を吐き露を呑んで只管に神仙の境に憧れて居る。

而も又一方には専ら名利に汲々として日も是れ足らざる徒輩がある。

彼らは朝に夕に東方西走して徒に浮雲の榮耀榮華を趁うて居る。

かくて與に共に中間におのずから大道の存するを知らず、相率いて一隅を取って、あたら一生を誤り暮らしてしまふ。

抑も大道は固と到る所にある。而して天下の万事はただ義に由り、兄弟の間はただ友と敬に由る。

然るに前二者は悲しいかな、着眼此処に及ばず、憐れむべし、自ら甘んじて、この人情の自然に戻って居る。

誠に以って歎かましい極みではないか。

茲に、この長詩が成つて即ち高らかに吟じて上ぐれば、声谷々に木霊し、

風は落葉を吹き捲つて、満山にざわざわと鳴り渡るのである。

予瀝よれき(こぼればなし)

木内敬篤

○是実に後年我が実業界の大元勳たる青淵洪沢栄一先生が弱冠十九歳の作である。時は安政五年、新時代の波がひたひたと旧日本の足許に押し寄せて来て、世は將に覚醒の第一晨に入らんとしている時である。

胸中鬱勃たる青春の血を湛ふるもの、誰か徒爾晏如たり得んや。

先生また新時代の脚光を浴びて、颯爽として革新行路の初程に上がった。而してその第一声が、端なくもこの『内山峽』の一篇となったのである。此の行、固もとより一商売としてのそれであった。而も先生の家は其の先士林に出て、世々里正りせいを勤めた豪農であった。

其の家風自ずから士気を帯ぶるもの固より理の当然である。詩中『三尺の腰刀』といい、『一卷の肩書』というもの、是亦その自らなる顕現である。

此の詩後半、一転して遁世清心の士を排し、汲汲名利の客を斥けて、中間に大道の存するを示唆し、天下の万事唯だ一の誠に成るを教え、更に進んで父子の親、君臣の義、兄弟の友敬を説いて士人を戒める所、宛然是れ儒道の大経、宣なる哉、後年經典『論語』を基調とする洪沢哲学を樹立し、士魂商才の実業道大成して、天下士庶人をして率由そつゆする所を知らしめた事や、而もこの弱冠青淵子の処女作『内山峽』に早くも之を確信してその大綱を示されたるに至っては、その夙成しゆくせい只々驚嘆きやうたん禁ずる能あたわざるのみである。

吾等今茲に此の名作『内山峽』を、敢えて現地内山峽の巖壁に鐫刻せんこくし、之を不朽に伝えんとするもの、是れ実に先生の遺訓を永く後昆こうこんに貽いして、更に第二第三の青淵子を我が信中より輩出せしめ、以って永く我が皇国の地の塩たらしめんとする微表に出づ、先生在天の英靈庶幾しよきはくは天駆けりして加護を垂れ給はん事を。

翻刻者からの難解な語句の説明

徒爾晏如

ただ空しく安らかに落ち着いての意味

士林

士の仲間

里正

村長・庄屋

率由

従うこと

夙成

早くに完成すること

後昆

後の子孫

貽

後に残すこと

地の塩

広く社会の腐敗を防ぐのに役立つ者

庶幾

乞い希うこと

卷末小記

維持とぎこれ 昭和十五年十一月、畏友いゆう小林儀助君の発願ほつがんと、故先生有縁の諸君子の参裏さんじょうとに由り、茲ここに故先生の令孫子爵洪沢敬三閣下の允許いんきよを拝して、現地内山峡の巖壁に、本詩鑿立せんりゆうの功即ち成る。

而して不肖外祖木内芳軒、曾かつて先生と蘭契らんけいの誼よしみありし宿縁に因り、偶々揮毫たまたまきごうの榮譽を荷う。

感銘 曷勝いづくんぞへん坦々我が未熟の永く金玉の遺いを冒瀆ぼうとくするものあると思ひ、慚汗さんかんうた転た背に洽あまねしし、更に茲ここに不文拝註の罪を重ねて真まことに措おく所を知らず。

後学 木内敬篤 董沐合掌

翻刻者からの難解な語句の説明

畏友いゆう(尊敬する友人)・参裏さんじょう(助けられて行えること)・允許いんきよ(認め許されること)・外祖がいそ(母方の祖父)・蘭契らんけい(蘭の香りのように美しい交わり)・揮毫きごう(書を書く)・感銘かんめい(深い感動)・勝たへん(感情を堪えられない)・秃筆とくひつ(自身の文才の謙遜)・金玉きんぎよく(本文から言うと、洪沢栄一の豊かな学識や才能)・遺芳いほう(同じく洪沢の後世に残る名誉・業績)・慚汗さんかん(恥じて汗の出ること)・転うたた(ますます)・洽あまねしし(汗がびっしより)・不文拝註ふぶんはいちゆう(謹んで本文を解釈したが学問に暗いという謙遜)・恐懼きようく(おそれかしこまる)・措おく所(身の置き場)

「内山峡」の歌

渋沢青淵先生原作

木内敬篤 国風訳

上毛野の山波とうねりて、

西遠く信濃の山に

そが中の内山の峡、

削り成する石の山々、

利根の南の百姓青淵、

物ひさぐと入るや信濃路、

小春の八日きその眺め、

松や楓や草鞋も軽く、

書を背に刀を腰に、

山を攀じ架橋渉り

分け入ればいよいよ険しく

奇し岩こゝかしこに

意気は天を目は白雲を、

臂を張り手に唾しつゝ、

屋下がりに頂上につく、

見渡せば四方晴れわたり、

遠く近くつばらかに見ゆ、

松紅葉はて知らなくに、

大き眺めは険しき中に、

縦に飽かず見てゆく、

ふと心内に閃くものあり、

手を拍ちて叫ぶ一声、

君見ずや彼の世捨人、

只ひたぶるに行ひ澄ますを、

又見ずや巷の人たち、

明暮に名と利を是れ追うを、

みな共に片々よりて、

二つなき生終ふなる。

道はそも到る所に、

天が下たゞ誠のみ、

父と子と将に君と臣と、

兄は導き弟は従ふ、

誰か知る道の近きを、

何しとて遠きに求む、

歌成りて高く吟へば、

落葉捲き山鳴り渡る。

内山の歌

三石勝五郎 作

一、神代のむかしそのむかし 碇いかりとゞめし荒船の

不動を祭る沢に湧く 水清らけき内山よ

二、松井にひゞく鐘の音も 民安かれと正安寺

安坂あんざか近くながむれば 招くもうれし扇橋

三、大間おうまにおわす産士うぶすなの 神の瑞牆みずがきかすみして

ポンポク岩ひんがしの 東に 五本松城夢あはし

四、白壁みゆる園城寺 金滝山も苔むして

一つ御堂みどうのあれあとに 栄えて立てるわが校よ

五、岩は疣岩疣水の 子持もこゝに水汲みて

仰げは北に天ぞそる 屏風は誰の手になりし

六、見よ耶馬溪やばけいもこゝぞよと 吠ゆるは獅子か南みなみに

つゞる岩々さゞめきて ほらのけ呼ぶは石尊か

七、中村すぎて相立の 一の鳥居ぬかに額ぬかづきぬ

苦水にがみず入れば 魚棲まず 木陰涼しき千ヶ滝

八、初谷しよやには湯をば探るべく 残るかをりも亀松の

孝子の碑をば大月に とぎして深き内山よ

皇紀二千六百年秋

平成七年二月二五日

木内 靖 誌るす